

平成26年度第1回岸和田市環境審議会 会議録

承認		事務局						《開催日時・場所》	
会長	昼馬委員	環境部長	環境保全課長	参事	担当長	主査	担当	平成26年7月10日(木) 14:30~16:30 岸和田市役所新館 4階第2委員会室	
◎	◎								
《出席者》 環境審議会委員：20名中14名									
池田委員	石田委員	泉原委員	大家委員	表委員	川瀬委員	佐久間委員	佐藤委員	高原委員	竹中副会長
○	—	○	○	—	○	—	○	○	○
谷口委員	常道委員	西岡委員	原委員	昼馬委員	松井委員	山田委員	吉田会長	吉野委員	横田委員
○	○	○	○	○	○	—	○	—	—
報告者 ・ 理事者 ・ 事務局	(報告者) 岸和田市環境審議会生物多様性地域戦略部会：中島部会長 (理事者) 大原副市長、山本環境部長 (事務局) 環境保全課：黒石課長、西村参事、倉橋担当長、小猿担当員 生活環境課：頓花課長								
傍聴人	1名								
《案件概要》 <審議事項> ・岸和田市生物多様性地域戦略の策定諮問にかかる答申について <報告事項> ・岸和田市環境計画の改定について									

≪内 容≫

別紙次第のとおり進行

● 委嘱状交付

交代のあった団体選出の委員等に委嘱状を交付。

● 市長あいさつ

信貴市長公務のため、大原副市長による挨拶文の代読。(あいさつ後、副市長退席)

● 自己紹介

● 審議会会長及び副会長あいさつ

— . . . — 議 事 — . . . —

● 議事録の確認委員の指名

議事録の確認は、吉田会長、厩馬委員で行う。

● 審議事項「岸和田市生物多様性地域戦略の策定諮問にかかる答申について」

(会長)

審議事項、「生物多様性地域戦略の策定諮問にかかる答申」について、審議いただきたい。

中島委員による部会での審議内容についての報告の後、事務局より答申案について説明されたい。

(部会長)

昨年2月に、岸和田市長から環境審議会に生物多様性地域戦略の策定について諮問があり、環境審議会に生物多様性地域戦略部会を設置し、審議会の委員から佐久間委員、高原委員の2名に加え、臨時委員の私を含む3名で内容についての検討を進めた。

部会では3回に渡って審議した。市民あるいは自然活動団体の意識調査結果、市内部に設置された生物多様性地域戦略策定委員会での検討結果などを参考にした。今年1月に本審議会で中間報告を行い、その後3月にパブリックコメントが行われたが、意見が寄せられることはなかった。

部会での審議を経てとりまとめられた戦略について報告する。資料1-3が戦略の全文となっている。4枚目のA3折り込みの概要によって全体の構成を確認する。

構成として1章から5章までである。1章が戦略策定の趣旨と背景、目標年度等の基本的事項、2章が岸和田市の特性と生物多様性を向上させるために求められること、3章には戦略が目指す将来像、基本方針、4章が取り組みの方向性、5章が推進体制という構成となっている。

1章の「生物多様性地域戦略とは」で、生物多様性と生態系との関係、なぜ戦略のようなものが必要とされるのかということ国内外の情勢、法規制等の整備状況を整理しながら明らかにしている。1ページの最後の文章に書いた「より良いまちづくりのためには生物多様性は欠かせない」という視点を明確にして、さらに生きものや自然を守ることが目的でなく、人々の暮らしを守ることが生物多様性を守ることであるという基本方針を示している。生物多様性と人々の暮らしに必要な生態系サービス、自然からの恵みで生活は支えられている、そういう視点を整理する必要から、表にして整理した。暮らしや生態系から供給される基盤がある、場所によってもいろんなものがある、持続的な利用も含めて全体的な生態系のサービスを理解できるよう整理した。また、生物多様性がもたらす恩恵をより身近に感じられるよう、4ページの吹き出し入りイラストでプラスとマイナスの両面で表現した。単に脅しだけでは

なく、生活がよくなるという前向きな表現を加えた。また、生物多様性、生態系という言葉や概念の理解において多くの人がつまずく。平易な言葉、解説を意識し、例として5、6ページで動向を含めて整理した。8ページに目標年限、岸和田市の上位計画である総合計画の目標年限を参照し、国内外の動向が見直しの大きな目安になることから、愛知ターゲットの短期目標年である2020年あたりで、成果と課題を検証する必要があることを加えて記した。つまり、2020年には中身の見直しをしていくということを提案した。表紙にあえて2014をつけ、永続的なものではなくて、今のものであるということ強調した。2014をつけるかつけないかで大きな議論あったが、見直しをしながらよりよいものにしていく姿勢を示すのが大切なこと、従って今の段階のものに限らないことを明確にして、中身をより良いものにしていくという意思を示した。つまり、継続して取り組んでいくということを強調できる形を、委員全員の想いとして目標年で表した。

つづいて、2章「生物多様性に関する本市の特性と求められること」で、まず岸和田市の環境特性を示そうとした。例えば11ページの図で、「本州の南限圏の『ブナ林』」、あるいは「渡り鳥の広域ネットワークの重要な久米田池等のため池群」、さらに「大阪湾において希少な干潟」、これは人工の干潟であるが、周辺にとって非常に重要な印象を与える要素を持っている。この三つを核に周辺とつながっていることをこの図で表現した。つまり、この大阪湾南部において岸和田市がいかに周辺の市にとって重要であるかということ認識できるような構図を示した。さらに13ページの図、環境省が実施した植生の基礎調査の図からの引用であるが、凡例では8つの場所を類型している。岸和田市にはこういう自然要素があるということを図に表すことで、見やすいものになっていると思う。もうひとつ、議論したのは、現在の自然度が低くても生きものが存在する場所はたくさんある。生態系を作り上げる場所として、市街地も大切にしていける自然の要素でないかということである。生物多様性の話からは公園とか庭は無視されがちであるが、生物には重要で十分使える、子供たちが使えるということで、あえてとりあげた。つづいて、14ページの図を見ると、先ほどの広域でつながる場所で説明した3つの核に加え、海、川、山、さらに、田畑、ため池、水路といった場所がつながって、市内で生態系のネットワークが築き上げられていることを表現しようとした。つまり、特にここが重要だからここだけというのではなく、市域全体を大切にすることで全体の生物多様性がよくなっていくということがわかるように工夫した。15ページ以降は、場所類型ごとに植生を整理した。例えば自然林であるとか、いろんな場所があるので、どういう状況にあるのかなるべく丁寧にかつ冗長にならないよう工夫しながら、今の自然あるいは今後どのような形で推移していくのか、時間をかけて議論した。細かな部分にまで意見が出た。生物多様性で重視されない地域、農地、さらに歴史的な視点も入れた議論をした。これが23ページまで続く。24ページを見ると、これは市民の意識と取り組みということで、特に意識調査の結果をまとめている。市民の自然への関心、評価は高いということは結果を見てわかるように、現在でも活動している人はいる。これをどうやって全体に広げていくのかについて分析するためのアンケート調査の成果をまとめている。28ページを見ると、主な目立った取り組みとして整理している。32ページでは市の施策として行っていったということ整理している。つまり、市民の意識、行政の取り組みがどういったものがあるかを整理している。さらに、33ページから「生物多様性を向上させるために求められること」は一体何かということ議論し整理した。岸和田市の環境特性、市民意識、取り組み状況といったことを課題として明記し、一つずつ課題ごとに必要とされる事項を整理した。ここでも、自然というものは移ろうものである。管理が必要である。そのためには継続的に行動を起こさなければならない。行

動する主体が誰であるかを入れていく。そういう表現になるよう努めた。

35ページからになるが、3章の「戦略の目指すもの」では、将来像を実現するための基本方針を最初に書きだした。「大阪南部の生態系ネットワークの要となり多様な生態系サービスに育まれたまち“きしわだ”」という基本方針を書き示して、例えば37ページに参考として生物多様性の記事、おおよその目安、指標性を示す、代表的な生物種を場所別に示して簡単に評価できるように、これがあるならこういう環境なのだと市民がある程度理解できるような表現になるよう努めた。部会でも、まず行政情報の整理と開示から始めることが大事である、あるいは学術機関が持つ情報やモニタリングなどの調査による情報によって補っていく、つまり学術と行政が連携して情報を評価していくことが重要であるという意見が集まった。この37ページの表は、きしわだ自然資料館の監修を経ている。自然資料館は、この人口規模の町では珍しいハイレベルの博物館で、多くの学術情報が集まってくる。この情報を上手に市民に公開し、活用することに意味があるということで表の監修をお願いした。

38ページに入って、4章の「取り組みの方向性」では、42ページから重点的な取り組みを整理した。特に、市民、事業者、行政、こういうことができるだろう、こういう取り組みをしようという表現をしながら、今の取り組みをさらに充実させるにはどうしたらいいのかということを中心に整理した。施策に関しても、戦略をすぐさま他の計画に盛り込んで実行するというのは意外と難しいので、今ある施策の中で少しずつ形にしていくものとして、特に取り組みが求められるところを、あえて「施策の例」「関連する計画等」ということで表現し、しかも明確に書くということで努めた。

最後に5章の推進体制を議論した。進行管理の部分では戦略委員会を核にして、PDCAサイクルをしっかりと機能させることが必要であるということ、さらに将来の戦略見直しが必要であるということを確認した。こういったことになると、つい行政ですればいいという意見になってしまうところを、そうではなくて市民一人ひとり、事業者、研究機関、学校が協力して連携しながら生物多様性を維持していくものだとすることを、誰かに責任を一方的に押し付けない体制について、随分時間をかけて議論した。

このように、部会での審議内容が戦略にどのように反映されてきたかを、戦略の説明を交えて述べた。ここで、中間報告でも説明した戦略の6つの特徴をもう一度述べる。

一つ目の特徴は、環境問題を扱う資料は危機を煽るものが多いが、脅し論法ではなく皆が主体的、積極的に前を向いて無理なく受け止められるように、デメリットだけでなくメリットを数多く表現するよう努めた。地域の利益のために自ら行動したくなる表現になっているように努めた。

二つ目の特徴は、主体は全員であるということを確認にした運営管理を提案している。誰しもが貢献できる要素があることを整理した。普段の行動で間接貢献できることを示し、直接貢献する仕組みも準備した。行政には、市民の行動に対して情報や場を提供する役割を求めている。岸和田市には市町村として極めてレベルの高い研究機関がある。それが自然資料館で、専門の学芸員が研究活動をしている。高いポテンシャルを利用し、住民個人が意見できる仕組みができています。

三つ目の特徴は、岸和田市の自然の過去と今を比較したうえで、今の悪い面だけでなく、過去にあった良い面だとか、あるいは今後どのように展開できるかといった四次元的な視点を理解してもらえようを表現内容になるよう努めている。一般的にはこういう話になると、自然度の高い方を守れば良いという話になりがちであるが、この戦略においては、そこだけではなくて身の回りのあたりまえの自然、あるいは人工的な自然も、一つひとつ実は生物多様性に貢献している、間接的に貢献できるということ表現できるようにしている。

四つ目の特徴は、自然を守るということになると、場所によって人間が関与することを嫌ってしまうこともあるが、そこをあえて特に都市部においては緑化などによる効果を否定しない。場所によっては上手に使い分けて、ここは人間が関与しない自然、ここはむしろ積極的に関与する自然、裸になってしまい生物がほとんどいなくなったところに、積極的に自然を人工的でもいいから配置していこうという提案になっている。

五つ目の特徴は、繰り返しになるが、見直す仕組みを持たせるということ、強調している。それが先ほど出てきた、この戦略は2014年版ですということ、2014年に作るというわけではないが、2014と書くことでわたしたち3名の強い想いをここに反映した。

六つ目の特徴として、岸和田市は、教育委員会、資料館を含めて過去にたくさんのデータを蓄積し整理している。そういったものを大切に。内容については地域の専門家である資料館の監修、評価を受けて表にするなど、なるべく自然の状況がわかりやすくなる表現内容に努めた。これらの六つの特徴を盛り込むように努めた。

最後になるが、私一人で決めたものではなく、高原委員、佐久間委員とたくさんの議論をする中で、いろいろな角度から大変熱心な議論を出来たと自負している。さらに、不慣れな運営に対して、二人の委員からいろいろ助言があった。この場を借りてお礼を言いたい。

戦略の内容も発展途上の要素が多々ある。皆さんには、この戦略を土台に取り組みをはじめ、つぎの戦略へと結びつけていく発展議論をお願いしたい。資料1-3を中心にした戦略の内容についての説明は以上である。

(会長)

様々な配慮、思い、知恵が込められていることのわかる的を射た報告であった。部会に参加した高原委員に補足意見を求めたい。

(委員)

報告のとおりである。生物だけではなく、文化が生物と深く関わっている。つまり、自然と人との相互関係によって文化が育まれることが重要である。昔、人が山に関わる中で恵みを得ていた。近年、人が山に入らなくなり、生物の種類や景観が変わってきた。よし悪しは別として、多くの問題が起こっている。社会変化に伴って、生物と人間の関係がうまく機能しなくなる可能性がある。里山整備などの活動が行われている中、今後、出てくる問題への対応、方向性が必要とされる。戦略に2014年を書き加えたのは非常によい。人々の活動、社会の活動と自然とのバランスをどう取るかが多様に大きく関係すると思われる。

(会長)

続いて、答申案について事務局から説明されたい。

〔事務局より説明〕

(会長)

ただいまの事務局の報告に対して意見・質問があればお願いしたい。

(委員)

単純な間違いがある。2ページの2(2)1行目「戦略を進める上で生息する生きものの種類、場所環境」の「場所」と「環境」をわけるのがよいと思う。2ページと3ページの「取り組み」という言葉の送り仮名が不統一である。

(会長)

送り仮名を統一されたい。「場所」と「環境」をわけたほうがよいという意見は如何。

(事務局)

戦略では、場所類型という表現を用い、場所毎の環境として捉えている。本文に合わせては如何。

(会長)

本文に従い、「場所環境」を「場所類型」に改められたい。

(委員)

戦略の13ページは引用と思われるが、この時点で阪南2区、干潟が存在する。表記できないか。

(事務局)

環境省が調査した場所類型図を出典としており、図面を書きかえるのは困難である。14ページの図に表記されていることで、ご理解願いたい。

(委員)

「ホームページを参考に作成した」と書かれている。加工していないのであれば、引用したとすべきと思うが如何。

(事務局)

引用と訂正する。

(委員)

自然林、里山林、人工林となっている凡例について、環境省の環境保全基礎調査では具体的な植生の名前になっている。例として、アカマツ林をあげると、マツクイムシの影響で実際の分布と図とが異なる。そのため、凡例に少し手を加えている。引用とすることはできない。

(会長)

類型図が、当時の植生、類型を示していることがわかった。凡例に手を加えているので、作成とする。読み手が理解できるよう、平成11年当時の植生を示したものであることを書き記すことはできないか。

(事務局)

本文中に補足説明を加える。

(委員)

阪南2区を図に加えた場合、類型は何になるか。

(委員)

干潟になる。

(会長)

そのための2014という表記である。戦略の見直し時に環境省の類型図更新を反映させる。類型図更新の予定はないのか。

(委員)

10年程度で更新されるものではない。

(会長)

専門の委員から何かないか。

(委員)

自然環境植生調査は、岸和田市内に限っても数年にわたる調査活動のつなぎあわせである。すべて最新の情報を求めるのは難しい。市が独自に作成するには無理があり、これが現状で有用な資料である。

(委員)

答申案の(2)の下から2行の部分の意図を理解しにくい。生態系に関する情報を収集、公開、更新する仕組みを作るよう書いている。「戦略だけでなく他の行政施策への反映に努める」というのは何を意味するのか。潜在的な地球気候変動などの要素があるので、温暖化対応等の施策の連動を意味しているのか。

(事務局)

戦略自体が抽象的な表現という意見があるが、各主体の中でも、岸和田市の重点的な取り組みとして、施策の例、関連する計画をあげ、具体的な施策の中で生物多様性に留意するよう求めている。情報の更新により、行政施策が陳腐化することが想定されるので、そのことへの対応を求めたものである。

(委員)

答申(4)の「意識し行動することを求める」という語尾は、市民に対して求めている。行政に限らず市民にも求めるのか。

(事務局)

そのとおりである。戦略本文では見えづらい審議意見を表すため、まず答申書の事務局案を作成した。事前の協議で、行政に対する意見に偏っているという委員の指摘を受け、市民の役割を明記する(4)の項目を追加した。

(部会長)

(2)の最後の2行に、強い思いを込めている。戦略の完成により、すべて完結してしまうことが往々にしてある。戦略に書かれたことが、産業分野、教育分野で検討される要素になることを願っての一文であると理解願いたい。

(委員)

(5)で空間的な連携だけでなく主体間の連携を記載しているところが理解しやすい。(2)の最後に例えば…という具体例が一つでもあればわかりやすいのではないか。

(委員)

文章を補足することで趣旨を明確にできないか。

(会長)

部会長と相談して表現を考えたい。

(副会長)

2022年度に何を求めるのかがわかりにくい。答申でも「市民一人ひとりが、生物多様性と生活との関係を意識し行動することを求める」というのは、評価するのが難しい。2022年度に向けての方向性、評価できる基準がないのか。抽象的に書かざるを得ないという意見があったが、達成されたことが評価されないというのは如何。

(事務局)

戦略の検討過程で、指標となるものを記述すべきという議論があった。情報に乏しく、生物多様性

に関する指標となるものが整理されていないため、戦略に表すことができなかった。十分ではないが、市民意識調査や府の統計資料など既存情報の整理と推移の把握を行い、行政、学術機関、市民が協力して新たな情報の取得、整理に努めることとした。

(会長)

おそらく、(6)の進行管理の中に関連すると思われる。循環型社会推進実行計画の中で取り組みの進行管理をする際に、状態指標と取り組み指標を分けて考えた。4章の取り組みの方向性のところに、関連する動向ということで指標を示唆することを取り上げている。これは取り組み指標にあたる。委員の指摘されたのは、状態指標にあたるものであろう。例えば、大気であれば空気はこの程度あってきれいである、生物であればこの生物が出てくるということである。生物多様性そのものを示す総合指標がないので、項目を指標化するのは難しい。生活の中で身近に感じながら進めることが大事であり、市民に分かりやすいということコンセプトにしている。(2)又は(6)の中で指標に関する記述ができればよいのではないか。

(委員)

会長の発言に賛同する。戦略ができた次の段階において、具体的に各主体はどう行動していくかというところが一番重要ではないかと考える。市民の立場からどう行動すればいいのか、具体的な行動基準を求められたときに、示せるものが必要なのではないか。その意味で、状態指標として生物多様性に関する数値目標を設けるのは困難である。設けたとしても非常に狭い地域の、狭義的なものになるだろう。また、目標を達成したことの確認自体が困難だと思われる。よって、取り組み指標として各主体の行動目標を立てるのが適当と考える。今後、この戦略をもとに、各主体が行動計画を具体化できるよう整理分類していくことが重要になる。それが一点。つぎに、(2)の下から2行目の「戦略だけでなく他の行政施策への反映に努めるよう求める」に関して具体例をあげて説明したい。岸和田の丘陵地区の開発計画で生物多様性、外来種の移入に関する議論があった。丘陵地区で「フクロウの森再生プロジェクト」がスタートしたことが新聞記事に取り上げられた。フクロウの生息自体が、生物多様性保全の一つの指標である。この丘陵地区での取り組みが具体例でないかと思われる。

(副会長)

2022年度に達成した項目について質や量を評価する必要がある。そのことを求めたい。

(部会長)

表現として弱い戦略に記述している。議論のあった具体的な行動計画については、各主体に強制するという性格のものではないが、とりまとめた案を42ページ～44ページに提示した。「身近な自然環境と生態系ネットワーク構築に向けての取り組み」に関して、市民が取り組むことのできる案を提示した。つぎに、第4章の各項目の下に囲み記事で関連する動向を示し、評価指標としての活用の可能性を提示した。行動計画、指標については、部会として一定譲歩し、第4章、第5章に表現した。

(会長)

部会長と同じ理解である。生物多様性の考え方、暮らしとの関係を提示することが戦略として大事である。戦略の中に行動計画のヒントになる情報や知恵が多く含まれている。戦略委員会や各主体が行動計画を具体化していくことになる。答申において、進行管理の中に行動計画の具体化を示す方向で整理したい。この議論により、戦略自体の位置付けが明確になった。

(委員)

2ページの上の図で、基盤サービスとして鳥があり、カッコ書きで「農業害虫被害軽減」と注釈されている。意図を確認したい。

(事務局)

鳥が有害な虫を駆除することで、農薬使用のより少ない作物を提供できることを表した。

(委員)

鳥は、農業に対してメリットとデメリットの両方をもたらす。メリットだけが記載されていることに疑問を感じた。戦略の見直しに向けて2014を書き記したことを評価したい。居住する地域の周囲にある人工林は、人の関わりが少なく放置されている状態で、多少の雨で小規模な地滑りが生じる。放置による森林の崩壊を避けることができない。地域で生活する市民と行政が状況を把握し、対策を講じる必要がある。

(会長)

鳥に関しては両面あるが、生態系への貢献を評価するため、メリットのみ記述されているということと理解願いたい。

行政施策の具体化、進行管理の指標化を明確にするという意見に対して、その趣旨を答申に反映できる表現内容を検討する。委員長、副委員長、事務局で協議する。

<「異議なし」との声あり>

(委員)

鳥について補足したい。鳥による生態系への貢献は、農業害虫被害軽減だけではない。森林では多くの植物が生育しているが、鳥が口にした木の実を運ぶことで、多様性の高い森林が作られる。生態系の維持にとって重要な位置を占めている。いくつもの機能をもっている。

(会長)

鳥による生態系サービスを含めて、生物多様性に関する理解を深めていきたい。

● 報告事項「岸和田市環境計画の改定について」

(会長)

つぎに報告事項に移る。事務局より説明されたい。

[事務局より説明]

(会長)

ただいまの事務局の報告に対して意見・質問があればお願いしたい。

(委員)

フクロウが生息する丘陵地区で進む開発に関して、市の内部でも開発を担当する部署と自然環境を守る部署では意見が異なると思う。開発によりため池の水を必要とする田畑が減少すると、池の管理が困難になり埋め立てざるを得ないこともある。環境計画の改定において、異なる考えを持つ部署同士が協議をする場はあるのか。意見を交換する場が必要と思う

(事務局)

環境計画の点検、見直しに関する協議の場として、環境計画等推進会議がある。改定にあたっては、推進会議で意見調整し、他の施策との整合を取りながら検討を進める。

(委員)

行政計画という位置付けで終わってはいけない。あらゆる主体が認知した計画であるためには、各主体が参加する必要がある。みんなが計画に責任を持たなければならない。府の環境総合計画を作った経験上、計画づくりの段階から市町村や市民団体の意見を聞く場を設け、みんなで作ることに意を注いだ。ネーミングも、行政計画ではないことを強く意識し、府を入れずに「大阪21世紀の環境総合計画」とした。各主体の役割分担、行動の目標を入れることで、多方面から評価された。市の環境計画も、みんなで作るという位置付けのもと、ネーミングも工夫されたい。

(会長)

単なる行政計画に終わらないこと。同じ趣旨のことが事務局説明にもあった。スケジュールにも懇談会又はワークショップが予定されている。両委員の意見を考慮し、計画改定に向けて取り組まれたい。

(委員)

資料2-1で2(3)の作業項目の(i)に「岸和田市の環境特性の整理」がある。最後の行に、「団体や市民を発掘するなど云々」とある。私は、クリーニング店の経営者、蛸地蔵商店街の役員、神於山保全クラブのメンバーである。発掘された市民が活動を継続し力を発揮するには、整理だけでなく、ほめることが大事だと思う。大阪府では、ごみ減量や優良エコショップ制度に対する表彰制度がある。商店街の多くの店舗が表彰を受けている。岸和田市にはそうした制度が少ない。整理にとどめず、ほめることを考えられたい。

(事務局)

きしわだ環境市民会議という団体の事務局を担っているが、過去にメンバーから同様の意見があった。市に評価されることが励みになり、次の取り組みにつながる。貴重な意見として検討したい。

(会長)

市民会議の話が出たが、意見はないか。

(委員)

ホームページで審議内容を公表すると思うが、戦略の冊子を出して終わりにするのではなく、作ったときの思いを伝達されたい。編集後記として作り手の思いを表すように、戦略の特徴や思いを発信することができればよい。

(会長)

事務局には、全員の思いが伝わるような工夫を期待したい。

(委員)

環境市民会議は発足後10年が経ち、事務局の担当者が代わり、メンバーが高齢化している。難しい局面にあるが、代表に意見を伝え進めて行きたい。

(会長)

本日予定していた議事のすべてを終了した。委員各位の協力に感謝する。それでは進行を事務局にお返しする。

(事務局)

これをもって本日の審議会を終了する。

以上